

# 日本語におけるミラティブ性の表現について<sup>1</sup>

—ミラティブのタ形の意味用法を中心に—

李 禹 錫\*

## 1. はじめに

日本語には下記のように、話者の驚きや思いがけないこと、いわばミラティブ性 (mirativity) を動詞のタ形<sup>1</sup>で示す表現がある。

- (1) [探していた本がカバンの中にあるのを見つけて]  
あ、ここにあった。 (井上2001:143)
- (2) [思いがけずサルを発見したところ、友人に気づかせようとして]  
ほら、あんなところにサルがいたよ。  
(定延2004:20より一部変更)

上述した用例の用法は「発見のタ形」<sup>2</sup>、「期待 (=過去の心象) の実現」<sup>3</sup>、「発見的現在」<sup>4</sup>などと呼ばれるが、つまり、「ある状態が過去から現在にわたって継続していることに今気づいた」(国広1967:66) というムード的機能をもつとされているのである。こうしたタ形の表現は従来「発見のタ形」などと呼ばれてきたが、本稿では諸研究における「発見」という用語の定義の曖昧さを避けたいため、ミラティブ性を表すタ形を「ミラティブのタ形」<sup>5</sup>と呼ぶ。なお、従来の研究では、ミラティブのタ形は述語が「状態的なもの」(国広1967:66、益岡2000:29) や存在動詞など (紙谷1979:21) に限定されることが多い。

- (3) [赤ん坊を見ていたところ、たまたま赤ん坊が笑い出した]  
あ、笑った。 (井上2001:104)
- (4) バスが来た! (尾上2001:373)

しかし、実際の使用場面において、(3)(4)のように動作動詞のタ形でミラティブ性を表す表現も少なくない。従来、こうした述語に動作動詞が現れるミラティブのタ形はさほど研究されておらず、そのメカニズムもはっきりしていない。ゆえに、本稿では動詞に用いられるミラティブのタ形についてテンス・アスペクト的な観点から再検討したい。

## 2. 先行研究

### 2.1. タ形の意味・用法

国広 (1967: 64-70) はタ形の意味・用法を九種類に分類したが、その中で、用法④は「過去に実現した状態が現在まで継続している」という用法 ((5)がその用例) であり、用法⑤は「ある状態が過去から現在にわたって継続していることに今気が付いた (発見のタ形)」という用法 ((6)がその用例) である。この用法⑤は用法④の「特別の場合」とされ、本稿の研究対象であるミラティブのタ形に該当する。

- (5) ああ、はらがへったなあ…。  
(鈴木1965:25) (国広1967:65)
- (6) あった、あった。なあんだ。こんなとこ

\*台湾大学・院生

ろにあったんだ。

(鈴木1965:25) (国広1967:65)

尾上 (2001:402) もこのミラティブのタ形を、現在まで継続する状態を表すタ形の「特殊な用法」としている。これは国広氏の見解と一致している。だが、いわゆる「特別の場合」[特殊な用法]とは何か、またミラティブのタ形のメカニズムは何なのかについては明言されていない。

また、前述したように、従来の研究ではミラティブのタ形は述語が「状態的なもの」に限定されるのが一般的であるが、前出した(3)(4)のような文はミラティブ性を有するものの、動作動詞のタ形であるため、長い間研究対象から排除されたのである。つまり、状態動詞の他に、動作動詞のタ形をも含めてミラティブ性の表現を再検討する必要があると思われる。

## 2.2. ミラティブのタ形における時間性

これまでのミラティブのタ形は、「発見のタ形」と呼ばれ、過去から現在まで続いている状態に今気づいたと解釈されている。では、なぜ恒常的な状態でありながら、時間性をもつタ形が用いられるのか、またその時間性的内実は何なのか問題になる。

ミラティブのタ形の時間性に関する議論は主に、タ形の〈完成性〉と〈過去性〉をめぐって展開されてきた。尾上 (2001:376-378) では、ミラティブのタ形はアスペクトの〈完成性〉に連帯する確認のムードが「独り行き」したものであり、「その事態を今確かに手に入れた」という「確言」のムードの下位分類であると述べられている。金水 (2000:65) もタ形のミラティブ性について、「時制性に関わる場合だけでなく、アスペクト性にも関わる」と指摘した。

一方、ミラティブのタ形はその〈過去性〉に由来するという論点は、岩崎 (2000:32-33)、井上 (2001:138-145)、定延 (2004:15-34, 2021:82-85)

など、数多くの研究で見られる。ここでは特に井上 (2001:145) の解釈を引用する。

発話時において存在することが明らかな状態 p (発話時において存在することが明らかな対象の恒常的な属性を含む) に対して、過去形を用いて「発話時以前に状態pが存在した」ということを述べた場合、発話時以前のある時点で観察された状態pを、発話時における同一の状態pから切り離して独立に叙述する(前景化させる)ことになる。

つまり、恒常的な状態にもかかわらず「過去形」のタ形が用いられるのは、観察された状態を独立に叙述して観察行為が「あった」ことを暗示し、その観察行為によって話者が何かを発見したというミラティブ性を表すためなのである。

ただ、前節で述べたように、従来の研究におけるミラティブのタ形は、その時間性が〈完成〉にせよ〈過去〉にせよ、基本的に述語が状態的なものに限定されているのがほとんどである。管見の限りで動作動詞のタ形のミラティブ性に言及された唯一の研究として、紙谷 (1979:21) が挙げられ、動作動詞のタ形のミラティブ性はある動作の実現いわば『既然』の意味に「付随したもの」と述べられている。しかし、「既然」というタ形の時間性とミラティブ性のつながりについては論じられていない。したがって本稿は、状態的なもののみならず、動作動詞のタ形をも取り入れ、テンス・アスペクトの観点からミラティブのタ形を全般的に再考し、その時間性とメカニズムの解明を試みる。

## 3. ミラティブのタ形の性質

### 3.1. ミラティブのタ形の使用条件

日本語では、話者の驚きなどのミラティブ性をタ形で表すときに、その使用には語用論的な制限

がある。寺村 (1984:105) ではそれを「期待 (= 過去の心象) の実現」と呼び、現在状態の発見をタ形で表現するには話者の事前=過去の期待が必要だと述べた。

なお、定延 (2004:27) ではさらに、「発見の『た』に必要なのは期待ではなく、探索意識である」と指摘した。例えば(7)では、話者が「雨が降っている」という期待がなくても、外の状況を確認しようという「探索意識」さえあれば、ミラティブのタ形が使えるのである。

- (7) [今雨が降っているかと思って、窓を開けて外を見ると実際に雨が降っている場合]  
やっぱり雨が降っていた。(益岡2000:25)

また、井上 (2001:138-145) は、タ形を用いることによって『『観察行為一状態の判明』』というプロセスがあったことが暗示される」と述べており、ミラティブのタ形とは話者の観察行為による発見だとしている。この「観察行為」は、上述した定延氏の「探索意識」をもって実際にとった行動だと考えられよう。用例(8)では、話者が「CDの中身は何だろう」という探索意識をもって「見たら」という実際の観察行為をとり、最後にそのCDの内容を確認できたという「発見」の流れが内包されている。

- (8) [今日太郎からもらったCDを聞きながら、日記を書いている]  
今日太郎からCDをもらった。(見たら) ベートーヴェンの「第九」だった。  
(井上2001:138)

以上、話者がタ形を使ってミラティブ性を表すには、「探索意識による観察行為」が必要であることが判明した。本稿はこれをミラティブのタ形の使用条件として、ミラティブ性と時間性のつな

がりを論じていきたい。

### 3.2. 状態動詞のタ形における〈過去完成〉とミラティブ性

タ形は〈過去完成〉と〈現在パーフェクト〉の二つのテンス・アスペクトの意味を有している。〈完成性〉とは、「時間の中に現像する運動を継続性を無視して時間的に限界づける」ことであり、その機能としては、一つの出来事の完成を受け継いで次の出来事を独立的に語り続けること<sup>6</sup>である(工藤1995:66)。上述の観点に基づき、過去に順次的に起きた複数の出来事の場合、そのタ形の〈過去完成〉には、前の出来事の完成を受け継いでから時間的限界をつけ、そして次の出来事を個別的に語り続ける機能がある。例えば(9)は図1に示してあるように、「叫ぶ」「言う」「立ち上がる」といった動作が含まれるそれぞれの出来事においては、前の出来事の完成を引き継いだと同時に、時間的な限界をつけることによって、次の出来事を個別的に語り続けるという、〈過去完成〉のタ形の機能が見られる。

- (9) 駆けこんできた兵が、血の気の失せた顔で叫んだ。そして、「ここにも敵が来るぞ、火炎放射器でやられるぞ」と言った。住民も兵も、おびえたように立ち上がった。  
(工藤1995:65)

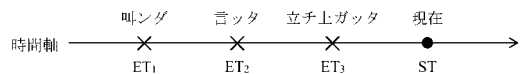


図1 動作動詞のタ形における〈過去完成〉(用例(9))<sup>7</sup>

ただ、用例(9)に現れたタ形はすべて動作動詞のタ形であり、それぞれの出来事の完成を「時点」で表現できるのに対して、状態動詞は継続している状態を意味するため、その〈過去完成〉のタ形が表すのは過去時点ではなく、過去の「時間帯」

なのである。例えば(10)の状態動詞「いた」(ET2)は、図2のように「やってきた」(ET1)と「戻ってしまった」(ET3)の二つの出来事に囲まれ、過去の限られた時間帯となるのである。

- (10) 田中さんは先週仕事のため台北にやってきた。その後ずっとこの町にいたが、昨日急に日本に戻ってしまった。(作例)

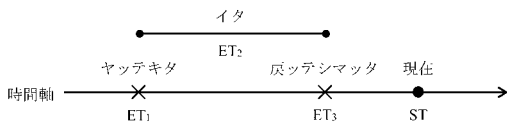


図2 状態動詞のタ形における〈過去完成〉(用例(10))

この状態動詞の〈過去完成〉の骨組みをミラティブ性のある文(11)に当てはめてみよう。

- (11) [失くした鍵を見つけて]  
あ、(探してみたら) ここにあった！  
(作例)

(11)では、話者が「失くした鍵を探してみよう」という探索意識をもって「探してみたら」という観察行為をとり、最後に鍵の存在状態を発見したという「探索意識による観察行為一状態の発見」の流れが考えられる。

この流れからミラティブのタ形と〈過去完成〉について次の図3のように考えられる。

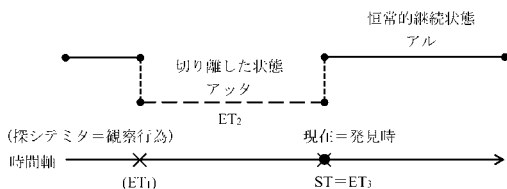


図3 状態動詞のミラティブのタ形と〈過去完成〉(用例(11))

図3に示してあるように、状態動詞である「ある」は一般的に時間性のない恒常的な状態を表す

が、その継続している恒常的な状態から、あえて「あった」のタ形を用いて一部を単独に切り離しておく。これは発話時である現在より前の過去にある状態を独立に叙述するためなのである。これは井上(2001:145)の〈過去〉の機能についての観点と一致している。

だが、「観察行為があったことを暗示する」という機能は、タ形の〈過去性〉ではなく、むしろその〈完成性〉にあるのではないかと考えられる。前述したように、状態動詞のタ形は「時間帯」であり、時間帯の始まりはその前の出来事の完成を受け継ぎ、自らの完成で次の出来事の始まりにつながるのである。したがってミラティブのタ形の文においては、状態動詞のタ形の使用によって、その切り離された「過去の状態」(ET2)より前の出来事=観察行為(ET1)がなされたことが暗示される。また、この切り離された状態はその後の出来事=話者の発見(ET3)とともに、時間的限界がつけられるのである。こうした「探索意識による観察行為一過去状態の存在一状態の発見」という、過去の時系列における一連の出来事を順次的に表せるのが、まさに〈過去完成〉のタ形の機能なのである。

つまり、状態動詞のミラティブのタ形は、恒常的な継続状態から一部の〈過去〉の状態を切り離して独立に叙述する。その一部の状態は〈完成性〉で前の出来事=観察行為の完成を受け継ぎ、次の出来事=話者の発見と同時に時間的限界がつけられる。これにより事前観察行為の存在と話者の発見が暗示され、「探索意識による観察行為一過去状態の存在一状態の発見」という「発見」の流れが順次的に提示されるのである。よって、状態動詞のミラティブのタ形はその〈過去完成〉に由来することが解明された。

### 3.3. 動作動詞のタ形における〈現在パーフェクト〉とミラティブ性

タ形のもう一つのテンス・アスペクト的意味の

〈現在パーフェクト〉を説明する。〈パーフェクト性〉とは「ある設定された時点において、それよりも前に実現した運動がひきつづき関わり、効力をもっていること」(工藤1995:99)であり、その機能としては、設定時点に先行した出来事を設定された時点に引きつけ、出来事の生起順序を入れ替えて叙述すること<sup>8</sup>である。そして〈現在パーフェクト〉とは、その設定時点を現在にするものである。例えば(12)では、

- (12) 私はもう結婚した (=もう結婚している) んですよ。 (作例)

タ形を用いることによって、「結婚した」という先行の出来事を発話時点である現在に引きつけ、「話者は今既婚者である」という先行した出来事の効力を現時点で提示することができる(図4を参照されたい)。このときのタ形はテイル形に置き換えられる。



図4 動作動詞のタ形における〈現在パーフェクト〉(用例(12))<sup>9</sup>

前節で述べたように、状態動詞のミラティブのタ形は恒常的な継続状態から一部の過去状態を切り離し、その状態の〈完成性〉で事前観察行為と話者の発見が暗示される。だが、動作動詞のタ形はこうした限られた時間帯ではなく、動作の開始か終了の時点を表す<sup>10</sup>ため、そのミラティブのタ形は先行した出来事における「動作の開始か終了」による効力に今はじめて気づいたと考えられよう。その先行した出来事の効力を発見時点である現在に引きつけるのが、まさに〈現在パーフェクト〉のタ形の機能であろう。

次の用例(13)を見よう。

- (13) [待っていたバスが道の果てから来ているのを見かけて]

あ、(見たら) バスが来た! (作例)

(13)では、バスが来てから、話者が「見る」という観察行為(ET2)をとり、「バスが来始めた」という出来事(ET1)における「動作の開始」を確認し、最後に「もうすぐバスに乗れる」という先行の出来事による効力を発見するという、[ある出来事の開始—探索意識による観察行為—先行した出来事の効力の発見]の流れが考えられる(図5を参照されたい)。

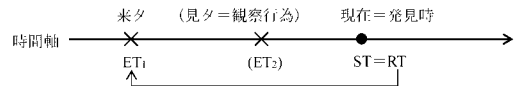


図5 動作動詞のミラティブのタ形と〈現在パーフェクト〉(用例(13))

なお、(13)における出来事の実際の生起順序は「バスが来た→見た」ではあるものの、前述したパーフェクト性の機能によって「見た→バスが来た」という順序で記述できたわけであろう。また、(13)でのミラティブのタ形は先行した「動作の開始」を表すのに対して、(14)のように「動作の終了」による効力を発見する例も見られる。

- (14) [さっき見かけたカラスがいつの間にかその場から立ち去って]

あ、(見たら) 逃げたか。 (作例)

つまり、動作動詞のミラティブのタ形は〈現在パーフェクト〉で、ある出来事における動作の開始か終了を設定時点の現在に引きつけ、その出来事による効力に今気づいたというミラティブ性を表すのである。その中で[ある出来事の開始か終了—探索意識による観察行為—先行した出来事の効力の発見]という「発見」の流れが考えられる。

ただ、状態動詞のタ形の順次的な叙述方法とは異なり、先行した出来事を現在時点で振り返ってみるのがそのテンス・アスペクト的な特徴である。以上により、動作動詞のミラティブのタ形はその〈現在パーフェクト〉に由来することが判明した。

#### 4. まとめ

本稿の考察を通して、ミラティブのタ形にあるミラティブ性とその時間性のつながりを解明した。タ形のミラティブ性の特徴は話者の探索意識による事前の観察行為が必要であるため、本稿ではこれを前提として、ミラティブのタ形を述語が状態動詞である場合と動作動詞である場合に分けて分析した。

状態動詞のミラティブのタ形は〈過去完成〉のタ形に由来することがわかった。まずタ形を用いて恒常的な継続状態から一部の〈過去〉の状態を切り離して独立に叙述する。次にその一部の過去状態の〈完成性〉によって事前観察行為の存在と話者の発見が暗示される。その「発見」の流れは、[探索意識による観察行為—過去状態の存在—状態の発見]であり、これは時系列に沿って順次的に叙述するのが特徴である。

一方、動作動詞のミラティブのタ形は〈現在パーフェクト〉のタ形に由来することがわかった。ある出来事における動作の開始か終了を設定時点の現在に引きつけることによって、その先行した出来事の効力に今気づいたというミラティブ性を表すことができる。その「発見」の流れは、[ある出来事の開始か終了—探索意識による観察行為—先行した出来事の効力の発見]であり、これは現在時点で先行した出来事を振り返ってみるのが特徴である。

以上、状態動詞と動作動詞は両方ともタ形でミラティブ性を表す機能を有するが、その時間性のメカニズムや「発見」の流れには相違があることが本稿の考察を通して明らかにできた。ところが、

日本語におけるミラティブ性の表現はタ形以外の形式で現れることもある。それは今後の課題としたい。

#### 注

- 1 本稿で言及するタ形は主節末尾に助動詞の「た」が現れる表現に該当する。
- 2 国広 (1967:66)。
- 3 寺村 (1984:105)。
- 4 尾上 (2001:402)。
- 5 本稿ではミラティブ性を標示する文法要素をミラティブ (miratives) と呼ぶ。
- 6 工藤 (1995:66) はこの機能を「継起性」と呼ぶ。
- 7 本稿はETを「出来事時点」、STを「発話時点」としている。
- 8 工藤 (1995:114) はこの機能を「(一時的) 後退性」と呼ぶ。
- 9 本稿はRTを「設定時点」とする。
- 10 金水 (2001:63)。

#### 参考文献

- 井上優 (2001) 「現代日本語の「タ」」松本功 (編) 『「た」の言語学』 pp. 97-163. ひつじ書房。
- 岩崎卓 (2000) 「テンス 日本語における文法カテゴリとしてのテンスとは何か」『日本語学』 19 (5) : pp.28-38. 明治書院。
- 尾上圭介 (2001) 『文法と意味 I』くろしお出版。
- 紙谷栄治 (1979) 「「た」の特殊な用法について」『京都府立大学学術報告. 人文』 (31) : pp.17-30. 京都府立大学学術報告委員会。
- 金水敏・工藤真由美・沼田善子 (2000) 『時・否定と取り立て』岩波書店。
- 金水敏 (2001) 「テンスと情報」音声文法研究会 (編) 『文法と音声』 pp. 55-79. くろしお出版。
- 工藤真由美 (1995) 『アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間の表現—』ひつじ書房。
- 国広哲弥 (1967) 『構造的意味論—日英両語対照研究—』三省堂。
- 定延利之 (2004) 「ムードの「た」の〈過去性〉」『国際文化学研究 : 神戸大学国際文化学部紀要』 21 : pp.1-68. 神戸大学国際文化学部。
- 定延利之 (2021) 「染み込み速度と「た」」庵功雄・田川拓海 (編) 『日本語のテンス・アスペクト研究を問い直す 第2巻—「した」「している」の世界』 pp.71-93. ひつじ書房。
- 鈴木重幸 (1965) 「現代日本語の動詞のテンス—言い

- きりの述語に使われたばあい―』『ことばの研究』  
2：pp.1-38. 国立国語研究所.
- 寺村秀夫（1984）『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』く  
ろしお出版.
- 益岡隆志（2000）『日本語文法の諸相』くろしお出版.
- 松田文子（1998）「眼前事態描写における「夕」の機  
能―過去時への遡りを要請する「夕」」『日本語教育』  
（97）：pp.72-82. 日本語教育学会.